平和憲章《星の友情》論議の意味を問う

—《ニーチェ対ヴァーグナー》問題のゆくえ—

酒　田　健　一

1

「星の友情。—われわれは友人であったが，互いに疎遠となった。しかしそうなったのは当然のことであり，われわれはそれを恥ずかしいことのように隠したり，曖昧にしたりするつもりはない。われわれは，それぞれがその目的とその航路を持つ二隻の船である。われわれは交差し合うこともあるだろうし，かつてそうしたように互いに祝いの言葉をかけ合うこともあるだろう。—そうした時にはこの健気な船たちは同じひとつの港の中に，同じひとつの太陽の中に静かに停泊したものだ。まるでもうすでに目的地に辿り着き，同じひとつの目標を持っていたかのように思われもしたのである。だがやがてわれわれの使命の全能の力がわれわれを再び引き離し，異なる海と領域へと押し流した。われわれが再び会うことはもうないかもしれないし，—たとえ再会することがあっても，もう互いに見分けがつかなくなっているだろう。異なる海と異なる太陽がわれわれを変えてしまっているのだ！　われわれが疎遠にならざるを得なかったのは，われわれを支配する法則である。まさしくそのことによって，われわれはまた互いに一層畏敬の念を抱き合う仲になるべきなのだ！　まさしくそのことによって，われわれのかつての友情への追憶は一層神聖なものとなるべきなのだ！　多分われわれの非常に異なるさまざまな道や目標が小さな行程として包含されているかもしれない巨大な，眼に見えない曲線や星の軌道が存在するのだ，—このような想念にまでわれわれを高めようではないか！　しかしわれわれがこの崇高な可能性の意味において友人以上のものであり得るためには，われわれの人生はあまりに短かく，われわれの視力はあまりに乏しい。—それゆえわれわれは，われわれの星の友情を信じることにしたいのだ，たとえわれわれが地上の仇敵であらざるを得ないとしても。」

（『華やかな知識』279番）[1]

ニーチェのいわば《友情頌》のひとつである上記のアフォリズムは，かつてルー・アンドレーアス=サロメの証言によって，ニーチェが友人パウル・レーを念頭に置いて書いたものとされ[2]，この《友情》の宛先の問題は一応の決着をみたかに思われたが，しかし彼女の証言もニーチェ自身の言葉を直接伝えるものではなかったがために，由来，この宛先につ

1) Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe (KGW), hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Berlin, 1967 ff. V / 2. S. 203.

2) Lou Andreas-Salomé: Friedrich Nietzsche in seinen Werken. Wien, 1894. Neuaufl. Frankfurt / M., 1994. S. 173.

いての詮索は未解決のまま絶えず蒸し返され，例えばクルト・フォン・ヴェステルンハーゲンの辛辣な総括によれば，パウル・レー，ヤーコプ・ブルクハルト，フランツ・オーヴァーベック，リヒャルト・ヴァーグナー等々，誰彼なしに「宛先を交換できる響きのよい献辞」[3]のたぐいとして，このアフォリズムはいわば受取人不明の手紙となって宙に漂い続けてきたのである。しかるにこのいわく付きの友情書簡の宛先を最終的にヴァーグナー以外にはあり得ないと断定し，そうすることによってこのニーチェの側からの《星の友情》の理想のうちに《ニーチェ対ヴァーグナー》の，あるいはむしろ《ニーチェ派対ヴァーグナー派》の多年にわたる《人間的，あまりに人間的》な地上の確執の泥沼から両者を共に救出するための唯一の道，いわば《ニーチェ対ヴァーグナー》永遠平和のための天上的原則を見出すことができると確信し，この確信を感動的な語調と共に表明したのがマッツィーノ・モンティナーリである。彼はその論考『百年前のニーチェとヴァーグナー』(1978) において，伝記的研究とそれに随伴するさまざまな現象のすべてがニーチェ派，ヴァーグナー派のいずれからも濫用されることの危険性を指摘し，「ニーチェのヴァーグナーとの訣別が一個の精神的，哲学的行為であったという決定的な事実を絶えず自覚し続ける」こと[4]，例えば「ニーチェの反ヴァーグナー主義闘争における反国民主義的，反ゲルマン主義的，反ロマン主義的，反・反ユダヤ主義的，反・反啓蒙主義的，反形而上学的，反非合理主義的，反神話的 (反ジェスイット的)」要因を見落とさないこと[5]が，問題の歴史的把握のための不可避の見地であると主張したのち，伝記的研究の偏重とその重圧から《ニーチェ対ヴァーグナー》問題をより広範な哲学的・歴史的研究の地平へと解放するための唯一の可能性をあの《星の友情》の超地上的・超伝記的理念の中に見出し得るという確信のもとに，このアフォリズムの後半部を引用して彼の論述を締め括るのである[6]。

以来，このモンティナーリの認識と断定と感動はドイツにおける《ニーチェ対ヴァーグナー》問題の研究者たちの間に支持の根を伸ばし，《星の友情》の理想の中に地上の確執と反目，誤解と怨恨をはるかに見下ろす高みにあって互いに畏敬の眼差しをもって見つめ合うニーチェとヴァーグナーの，あの《われら対蹠者》[7]の本来の姿を読み取るべきであるとする信念が，少なくともドイツにおいては主導権を握り，この研究領域の入口と出口とを大きく塞ぐかたちで立ちはだかろうとしているかに見える。このモンティナーリの方向の強力な推進者の一人で，ジョルジョ・コッリ＝マッツィーノ・モンティナーリ編纂になる『ニーチェ全集』を基に二度にわたって《ニーチェ対ヴァーグナー》関係資料集を編集しているディーター・ボルヒマイアーは，この両資料集 (『フリードリヒ・ニーチェ，ヴァーグ

3) Curt von Westernhagen: Wagner. Zürich, 1968. S. 537.
4) M. Montinari: Nietzsche und Wagner vor hundert Jahren. in: Nietzsche Studien (NS) Bd. 7. Berlin, 1978. S. 293.
5) ibid. S. 300.
6) ibid. S. 301f.
7) F. Nietzsche: Nietzsche contra Wagner. KGW. VI / 3. S. 422.

ナーの場合』，1983[8]，および『ニーチェとヴァーグナー，ある画期的出会いの諸段階』，1994[9]）の後記においても，また，『リヒャルト・ヴァーグナー提要』所載の論考『リヒャルト・ヴァーグナーとニーチェ』(1986)[10]においても，アフォリズム《星の友情》の全文あるいは部分引用によって論述を締め括ることで，モンティナーリ路線の継承を明らかにしているが，それと同時に彼は，モンティナーリには見られない新たな視点をこの路線に加えている。ニーチェとヴァーグナーとの関係をシラーとゲーテとの関係に対比させることによってドイツ文化史における《ニーチェ対ヴァーグナー》問題の位階を権威づけようとしているのがそれである。とはいえこの対比の論拠は深く追求されたものではなく，この種の概説にありがちな，ドイツ文化の歴史の中に占めるその絶大な意義と類似性への一瞥，例えば，ゲーテとヴァーグナーに対してシラーとニーチェとがいずれもそれぞれの「先輩の芸術の呪縛」から解放されないまま，「競争者の緊張」をそれぞれの「程度の差はあれ秘め隠された憎悪」のうちに放出しながら，それぞれの先輩によって具現されている「芸術家タイプ」の最も炯眼な分析者となってゆくという教科書的な指摘を越えるものではない[11]。だがここで注意すべき点は，この対比が論述の冒頭部に置かれていること，それによって末尾の《星の友情》の引用の意味を一定方向に規定しようとしていることである。われわれはボルヒマイアーの手引きによって《ゲーテ・シラー像》を仰ぎ見つつ《ニーチェ対ヴァーグナー》問題の中へ導かれ，《星の友情》の象徴を仰ぎ見つつ《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を後にするのである。ボルヒマイアーの脳裏にヴァーグナーとニーチェが手を取り合って並び立つ銅像が浮かんでいたかどうかはともかく，この研究領域の入口と出口とがこの領域の神聖を見守る二対の守護霊によって扼されるという権威主義的な閉塞状態が醸成されつつあることは否めない。《星の友情》の極光のもと，《ゲーテ対シラー》問題との対比を眼前に据えつつ《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を眺めるべきであるとするボルヒマイアーの，それ自体正面きって論駁しにくい正論の権威主義は，《星の友情》の理想を理解しないニーチェおよびヴァーグナー両派の代弁者たちに向けられた彼の殆ど叱責に近い訓戒調の批判に露骨に現れている。ボルヒマイアーは最初の《ニーチェ対ヴァーグナー》関係資料集の後記『ヴァーグナーの場合・トリスタンの場合・ニーチェの場合』の中で，ニーチェのヴァーグナー批判のすべては《星の友情》以外に望むべき目標をもはや見出し得ない者の《悲しみの道》(Via dolorosa)[12]であったのだと結論づけたのち，このア

8) Friedrich Nietzsche - Der Fall Wagner, Schriften-Aufzeichnungen-Briefe, hrsg. von Dieter Borchmeyer. Frankfurt / M., 1983.

9) Nietzsche und Wagner - Stationen einer epochalen Begegnung, hrsg. von Dieter Borchmeyer und Jörg Salaquarda, 2 Bde. Frankfurt / M., 1994.

10) D. Borchmeyer: Richard Wagner und Nietzsche. in: Richard-Wagner-Handbuch, hrsg. von Ulrich Müller und Peter Wapnewski. Stuttgart, 1986.

11) D. Borchmeyer: Richard Wagner und Nietzsche. S. 114f. / Nietzsche und Wagner - Stationen einer epochalen Begegnung, Nachwort. S. 1276f. この後記の筆者がその内容，文章からボルヒマイアーであることは明らかである。

12) D. Borchmeyer: Der Fall Wagner・Der Fall Tristan・Der Fall Nietzsche (Nachwort von: Friedrich Nietzsche - Der Fall Wagner) S. 640.

フォリズムの全文を論述のエピローグとして掲げるのだが，それに先立って彼は，こんにちなおニーチェとヴァーグナーとの「地上の敵対関係」に執心し続ける者がいるとすれば，それは「半可通教養人，すなわち，ニーチェの離反を許さず，ニーチェの不純な性格を暴きたてようとする固陋な老ヴァーグナー心酔者か，あるいは，自分たちの反ヴァーグナー感情のちっぽけな炎をニーチェの吐く息を借り，きれぎれの引用を手掛かりに煽りたてようとするその反対派か，そうした連中だけである」ときめつけたのち，さらに「この種の追随者たちに対してニーチェ自身が異常に攻撃的な言辞をもってわが身を守っている1885年のある遺稿」[13]の引用によって追い打ちをかけている。「自明のことだが，私は誰に対してもこうした私の評価を自分のものだと称する権利をそう簡単には認めない。ましてやこんにちの社会の身体に虱のようにたかっているあのすべての不遜なならず者たちに，いやしくもリヒャルト・ヴァーグナーのような偉大な名を口に唱えることなど許せるものではない。賛辞にせよ，抗議にせよだ」[14]。1980年代においてなお依然としてこのような剝き出しの正論が荒々しく叩きつけられねばならない状況，《ニーチェ対ヴァーグナー》問題をめぐる両派の確執の根深さと根強さとは，まさに驚嘆に値する。こうした《地上》の確執はたしかに研究の自由を食い荒らす害虫には違いない。しかしそれにもまして，こうした害虫としての俗論を権威の威嚇を武器に排除することによって成立する超地上的・無菌的研究体制の内包する危険もまた無視することはできないだろう。

平和憲章《星の友情》の理念のもとに研究領域の全体を包み込むばかりでなく，この理念に研究の方法までも規制させているのが，1991年に刊行された12人の研究者による論集『《ヴァーグナーの場合》，ニーチェのヴァーグナー批判の起源と結果』[15]である。最新のニーチェ研究の基盤はジョルジョ・コッリ＝マッツィーノ・モンティナーリによる『ニーチェ全集』とクルト・パウル・ヤンツの『ニーチェ伝』[16]の成果によって確立されたとする認識の上に成り立ったこの共同研究は，《星の友情》のアフォリズムの全文引用をもって結ばれているヤンツの論文『われわれを支配する法則—フリードリヒ・ニーチェのヴァーグナー経験』[17]を巻頭に据えることによって，モンティナーリ路線の継承を確認しているばかりではない。この論集の緒言の筆者（無署名）の短い総説は，このいわば強制的平和主義の実態をもあからさまに伝えている。すなわち，筆者氏は，「われわれはこんにちヴァーグナーとニーチェのいずれをも公正に扱うことができる，両者の側に立つことができる」という上記論文中のヤンツの言葉を引用し，「このような見地はたんなる和解志向から生じたものではなく，『ヴァーグナーの場合』を，それがたとえどれほど激越なものであろうと，あの宥和のアフォリズム《星の友情》のための補足として理解されねばならないという確

13) F. Nietzsche: KGW. VII / 3. S. 211.
14) D. Borchmeyer: Der Fall Wagner・Der Fall Tristan・Der Fall Nietzsche. S. 630.
15) »Der Fall Wagner« - Ursprünge und Folgen von Nietzsches Wagner-Kritik, hrsg. von Thomas Steiert. Laaber, 1991.
16) Curt Paul Janz: Friedrich Nietzsche - Biographie. München, 1978.
17) C. P. Janz: Das Gesetz über uns - Friedrich Nietzsches Wagner-Erfahrung. in: »Der Fall Wagner« - Ursprünge und Folgen von Nietzsches Wagner-Kritik.

固たる認識から帰結されたものである」と断定する[18]。ニーチェの『ヴァーグナーの場合』を《星の友情》の副読本として読むべきであって，その逆ではないというのである！ 議論の先鋭化は誹謗に脱しない限り，排除されないという緒言の筆者の付言[19]も，この平和憲章の君臨の前では虚しい。「〈私はヴァーグナーを憎む。だが私には他のいかなる音楽ももはや耐えられない〉と，こんにちそのように言う音楽家がいれば，私はその言葉を完全に理解する。しかしまた，〈ヴァーグナーは現代性を総括している。如何ともなし難く，われわれはまずヴァーグナー信奉者たらざるを得ない…と宣言する哲学者がいれば，私はその言葉も理解するだろう。」[20] このヴァーグナーへの解き難い《アンビヴァレンツ》を告白している命題をその序文の結びとして開始されるニーチェのヴァーグナー論の総括である『ヴァーグナーの場合』を，ニーチェを時として襲うかに見える心情吐露への衝動の所産のひとつである《星の友情》のアフォリズムの補足として読むことのできるどんな人間がこの世にいるというのだろうか！ 《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を《地上の抗争》の渦中に置いてはならないという絶対の正論のもとに，12 人もの研究者たちがその研究課題と内容の如何に関わりなく，片手を胸に当てつつ遙かなる幻影《星の友情》を仰ぎ見ている姿は，想像するだに異様である。

このような方向に，あるいは《星の友情》のこのような解釈に同調しない，あるいは同調しきれない研究者たちがいることは言うまでもない。「ヴァーグナーを正当に評価するためにはニーチェを潜り抜けていなければならない」というボルヒマイアーの言葉を引き取って，「それならばニーチェを正当に評価するためには，ヴァーグナーを，より正確に言えば，ニーチェのヴァーグナー理解と誤解とを潜り抜けていなければならない」[21] と打ち返すマンフレート・エーガーは，ニーチェとレーとの友情があの時期にはまだ「曇りのない」ものだったという事実を理由のひとつに挙げて《ヴァーグナー説》に賛意を送りながらも，問題のアフォリズムを「宛先を交換できる響きのよい献辞」のたぐいと呼んだヴェステルンハーゲンにも多少の同情を示すことによって[22]，モンティナーリ＝ボルヒマイアー路線に対してヴァーグナー研究者としての覚めた一瞥を投げている。しかし同じヴァーグナー研究者であるマルティーン・グレーゴア=デリンの立場は，一切の《星の友情》論議には参加しないという意味においてきわめて明快である。「ニーチェ事件 (der Fall Nietzsche) は，リヒャルト・ヴァーグナーの人生においてはひとつのエピソードに過ぎなかった。だがニーチェにとってはそれ以上のものだった。衝撃，燃え上がる体験，激情，ひとつの芸術の啓示であった。そしてこの芸術に彼は自己を情熱的に同化させたのである。彼の体質がそれをもはや受け付けなくなるまで。そしてそれが他のいかなる芸術にも劣ら

18) Einleitung von: »Der Fall Wagner« - Ursprünge und Folgen von Nietzsches Wagner-Kritik. S. 12.
19) ibid. S. 12.
20) F. Nietzsche: Der Fall Wagner. KGW. VI / 3. S. 4.
21) Manfred Eger: „Wenn ich Wagnern den Krieg mache . . .“- Der Fall Nietzsche und das Menschliche, Allzumenschliche. Wien, 1988. S. 12.
22) ibid. S. 139.

ずあまりにも世俗的，すなわち，あまりにも不完全であることが判明するまで。彼の道が分かれるときまで。彼の誇りが年長の，堪え性の無くなった頑固な男にとってもはや耐えがたいものとなるまで。彼の哲学の容赦のなさが，彼を鞭打つ創造精神がこの不平等条約を，彼か私か，の修羅場に変える時まで。」―その著『リヒャルト・ヴァーグナー』(1980) におけるニーチェの章「若き教授」をこのように書き始めるグレーゴア=デリン[23]は，しかしこの「修羅場」から両者を救い出すための，というよりはむしろ「修羅場」そのものを聖地化することによって両者の対立を浄化するための天上の祭壇を設けようとはしない。ニーチェの側からの幻滅は必然的であり，その結果としての離反も裏切りも，そして彼のヴァーグナー批判のすべてもまた必然的であり，それゆえこの必然性を描き出し，描き切るためにはこの「修羅場」は維持されねばならない。《地上》のものとして維持されねばならない。なぜならそれはあくまでも《地上》のものだったからであり，あくまでも《地上》のものであり続けるからである。これがその『リヒャルト・ヴァーグナー』の中に埋め込まれている幾つかの《ニーチェの章》において示される《ニーチェ対ヴァーグナー》問題へのグレーゴア=デリンの基本姿勢である。この地上の「修羅場」に代わる新たな関係の地平を模索する研究者たちが手を差し延べつつ振り仰ぐ《星の友情》の理想には，グレーゴア=デリンは見向きもしない。彼はこのアフォリズムについて「あれは実際はパウル・レーに宛てたものであって，ヴァーグナー宛てのものなどではまったくない」[24]というにべも無い一言を投げつけただけで，素通りしている。ルー・サロメの名を挙げることさえしていない。

地上の「修羅場」を研究の場として堅持しようとするグレーゴア=デリンの方向は，しかし，二人の偉大な精神の対蹠者がそれぞれの追随者たちの俗世の争いの喧騒から救出されて同じ雲の台座の上に並び立つ姿を仰ぎ見ようとする方向によって，次第に覆われつつあるかに見える。同じヴァーグナー研究者で，『リヒャルト・ヴァーグナー提要』の監修者の一人でもあるペーター・ヴァプネフスキーは，1987年にピーサでおこなわれたモンティナーリ追悼講演『ニーチェとヴァーグナー，ある関係の諸段階』を《星の友情》への一考察をもって締め括っているが，その際，「ルー・サロメの思い違いをそのまま踏襲している」グレーゴア=デリンの誤りをモンティナーリに依拠しつつ指摘した上で，このニーチェのヴァーグナーへの「エレギー」の全文を朗読するのである[25]。因みに，ルー・サロメはあの回想録の中で「うわべは共通の目標を追求しているかに見えながら，これまでになく疎遠となった」ニーチェとレーとの関係を述べている箇所に脚注を入れ，「《星の友情》と題された『華やかな知識』279番を見よ。この美しい文章によって，あの時，ニーチェはこの精神的提携に別れを告げたのだ」と記している[26]のだが，この回想録の新版 (1994) の編者

23) Martin Gregor-Dellin: Richard Wagner - Sein Leben, Sein Werk, Sein Jahrhundert. München, 1980, Neuaufl. 1991. S. 622.

24) ibid. S. 623.

25) Peter Wapnewski: Nietzsche und Wagner - Stationen einer Beziehung. in: NS. Bd. 18. Berlin, 1989. S. 422f.

26) Lou Andreas-Salomé: Friedrich Nietzsche in seinen Werken. 1994. S. 173.

トーマス・プファイファーはこの彼女の脚注に，「このアフォリズムはヴァーグナー宛のものであって，レー宛のものではない」という注釈を，疑問の余地なき自明の事実として押し被せている[27]。このことは《星の友情》に関するモンティナーリ＝ボルヒマイアー説がすでに絶大な強制力を持った定説となりつつあることを示している。

2

《ニーチェ対ヴァーグナー》問題の新たな展開を可能にすべき新たな地平の開拓のための共通認識の指標として重々しく，しかも事新しく持ち出されたのが，あの多年人びとの憶測に揉まれ，手垢にまみれた《有名》なアフォリズムであったとすれば，そもそもあのニーチェの膨大な遺稿集，ボルヒマイアーの言葉を借りるなら，その「最も重要な部分がヴァーグナー論である」[28]ような遺稿集の編纂は何であったのかと，モンティナーリに問う必要は多分ないだろう。彼は彼の求めるものを彼の編纂する遺稿集の中に見出さなかったからであり，もし見出していたならば，それを彼の新たな《星の友情》として掲げただろうからである。彼は，宣戦布告でさえも友情の証であるような，いや，宣戦布告それ自体が友情の証であるような対決の高みへ《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を昇華させ，それによってこの問題を多年にわたって押し包んできた俗世の軋轢と抗争の《泥沼》そのものを消滅させる可能性を提供するものが欲しかったのであり，そしてそういうものでありさえすれば，その質の如何を問わず，いわばどんな《星の友情》にでも手を出しただろうからである。ではどのような《泥沼》がそこにはあったのか？　前掲の論考『百年前のニーチェとヴァーグナー』の中の次の一節は，モンティナーリの抱える問題の所在とその性格とを明快に告げている。彼は，ニーチェの「反ヴァーグナー闘争」における「反国民主義的，反ゲルマン主義的，反ロマン主義的」等々の要因を忘れてはならないと述べたあと，こう続ける。「私は，ドイツ文化の歴史においてこのような反ヴァーグナー的な，ニーチェ的な傾向が1933年に喫した敗北の影響範囲と意義がいまもって完全には把握されていないとさえ思うのだ。あの時，―ナチ・イデオロギーの擁護者たちが主張したように―ドイツ民族は理性を捨てて本能を，歴史を捨てて神話を，ヨーロッパ精神を捨ててドイツ精神を選んだのだとすれば，われわれは更にこう付け加えよう，ニーチェを捨てて，ゲーテを捨てて，真のドイツ文化を捨ててと。」[29]―このモンティナーリの結びの付言は，異論の余地を残すものだろう。「真のドイツ文化」の概念は曖昧かつ抽象的である上に，それをゲーテの名と直結させるのはいわば教科書的常識への安住であるし，更にニーチェとナチ・イデオロギーとの無視できない関係を考えれば，「ニーチェを捨てて」の断定にはしかるべき釈明ないし解説が必要だろうからである。ところでモンティナーリが省いているこの釈明ないし解説をモンティナーリに代わって，しかもモンティナーリの側に立って引き受けな

27) ibid. S. 338f.
28) D. Borchmeyer: Der Fall Wagner・Der Fall Tristan・Der Fall Nietzsche. S. 637.
29) M. Montinari: Nietzsche und Wagner vor hundert Jahren. S. 300.

がら，しかし同時に平和憲章としての《星の友情》の内包する危険性を指摘しているのが，「モンティナーリの思い出に捧げられた」マッシーモ・フェラーリ・ツムビーニの論考『バイロイトにおけるニーチェ。ニーチェの挑戦，ヴァーグナー派とその反撃』(1990)[30]である。

ツムビーニは《星の友情》の旗印のもとに《地上の争い》として研究の舞台裏へ追いやられようとしているヴァーグナー，ニーチェ両陣営間の闘争の歴史，特にナチ政権下における主導権争いの泥仕合の歴史を敢えて表舞台に呼び戻す。彼は，長い間燻り続けながらも「バイロイト側の辛抱強い自制」によって辛うじて保たれていた《ニーチェ派対ヴァーグナー派》の抗争の均衡が，ナチ体制下において《ニーチェ派》が優位に立ったことから崩れ，巻き返しを図る《ヴァーグナー派》が強引なニーチェ批判の包囲網を敷いて「大攻勢」に転じ，1935年から38年までの間に刊行された一連のバイロイト関係出版物によってさながら「ニーチェ憎悪のサトゥルヌス祭」を現出させたばかりか，ついにはニーチェを「第三帝国の敵」(クリストフ・シュテーディング)として告発するところまで追い詰めてゆく戦局の推移を，この時期，「ニーチェ崇拝に対する龍退治の英雄」として登場し，1936年，37年，38年の『バイロイター・ブレター』の各号に掲載された論争文『ニーチェとドイツ音楽』，『ナポレオン主義，あるいは，英雄主義』，『《ヴァーグナーの場合》の原型』[31]によってドイツ民族の文化的伝統とはまったく異質なニーチェの精神構造の《非ドイツ性》を暴き，ニーチェの《デカダンス論》がフランスのポール・ブルジェの所論の文字通りの焼直しに過ぎず，それゆえ彼のヴァーグナー批判がいかに虚偽と欺瞞と底意に満ちたものであるかを「立証」し，これまで《バイロイト派》の手に負えなかった「ニーチェの偉大さに対する体系的，理論的，歴史的論駁」を成し遂げたクルト・フォン・ヴェステルンハーゲンの「輝かしい経歴」の一端と共に描き出す[32]。因みに，ツムビーニが参考文献のひとつに挙げているヴィンフリート・シューラー著『バイロイト派成立史』(1971)は，この《反ニーチェ派》の闘将ヴェステルンハーゲンの健闘ぶりをナチ政権下における《ニーチェ対ヴァーグナー》闘争史の典型的な実例として次のように紹介している。「バイロイトが国家社会主義のメッカとなってからは，ヴァーグナーの精神世界への支持表明はいよいよ騒々しいプロパガンダの様相を帯びるようになった。しかし党職権によるヴァーグナー崇拝にもかかわらず，バイロイトの巨匠に対する評価が決して不動のものでなかったことは，見逃せない事実である。このためベルリンの《ヴァーグナー学会》出身の青年バイロイト派スポークスマンであり，同時に筋金入りの国家社会主義者でもあったクルト・フォン・ヴェステルンハーゲンは，1935年，以下のような危惧をあからさまに表明している。いわく，

30) Massimo Ferrari Zumbini: Nietzsche in Bayreuth: Nietzsches Herausforderung, die Wagnerianer und die Gegenoffensive. in: NS. Bd. 19. Berlin, 1990.

31) C. von Westernhagen: Nietzsche und die deutsche Musik, 1936 / Napoleonismus oder Heldentum - Ein Beitrag zum Thema „Wagner und Nietzsche", 1937 / Das Urbild des „Fall Wagner", 1938. in: Bayreuther Blätter.

32) M. F. Zumbini: Nietzsche in Bayreuth, § 5.: Anfängliche Angriffsversuche und antisemitische Großoffensive (S. 274-291).

〈ヴァーグナーの芸術に対する総統の肩入れといえども，われわれの運動の広大な活動領域の中で，ヴァーグナーの全人格が縁遠いものとなり，あるいは，拒否的な反応を呼び起こすものとなっている事態を糊塗することはできない〉（ハンス・フォン・ヴォルツォーゲン宛，1935. 4. 23)。—そして更にその翌年，彼は同じ問題に関して，特に《ヒトラー・ユーゲント》との関わりを強調しつつ以下のように述べている。いわく，〈現況を眺めるに，ヴァーグナーとニーチェの影響は今後平行線を辿らず，若者の間でヴァーグナーがニーチェによって駆逐される恐れがある〉（ルートヴィヒ・シェーマン宛，1936. 11. 10)。」[33] —しかしこうしたヴェステルンハーゲンの活動の重要な戦略拠点のひとつだった『バイロイター・ブレター』は，1938年に廃刊となり，翌1939年，ドイツは戦争に突入し，そして第三帝国は崩壊への道を辿る。そしていま，戦後半世紀を経たこの時期においてなお，《ニーチェ対ヴァーグナー》問題のためにわれわれの手元に残されているのは，せいぜい《地上の敵対関係》の起源と影響範囲についての曲がりなりの認識と見通しくらいのものであって，あの《星の友情》への確かな展望などは依然として開けていないというのが，ツムビーニの結論である[34]。

もっぱらニーチェの側に身を置いての戦況報告に終始しているとはいえ，これらの記述は，1980年代以降においてもなお《ニーチェ対ヴァーグナー》問題が過去の抗争の悪夢を払拭しきれずにいることを示している。むろんツムビーニは，《星の友情》の理想を追い求めるモンティナーリやボルヒマイアーの「一切の論争の彼岸に立とうとする」その「善意」[35] を疑うものではないとしながらも，しかし，この理想が事実を覆う美しい真実の役割を代行する大義名分となり，研究の最終目標と方法とをあらかじめ規定する力として作用する危険性を指摘せずにはいられないのである。彼は，「真のヴァーグナー」と「誤てるヴァーグナー」とを区別するボルヒマイアーの安易な図式主義を批判する。ボルヒマイアーによれば，ニーチェのヴァーグナーからの離反はほかならぬヴァーグナー自身を疎外するような傾向，例えば，1872年以後の「熱狂的国粋主義」や『バイロイター・ブレター』を支える「単純なゲルマン主義」からの離反であり，それゆえ「ニーチェの離反はもっとも本来の意味における区別，すなわち，誤てるヴァーグナーから真のヴァーグナーを解き放つという意味での区別」であり，この誤てるヴァーグナーからの離反がニーチェに「リヒャルト・ヴァーグナーについて彼が心の底に抱いている像の純化を可能にした」というのである。ニーチェのヴァーグナー批判は，とりもなおさず「誤てるヴァーグナー」からの「真のヴァーグナー」の救出にほかならず，しかもこの「誤てるヴァーグナー」とは，「ドイツ賛美」や「反ユダヤ主義」の「世界観の沼」に深くはまり込んでいる限りでの，すなわち，「ドイツ人のもとでは一個の誤解でしかない」限りでのヴァーグナーであり，「真

33) Winfried Schüler: Der Bayreuther Kreis von seiner Entstehung bis zum Ausgang der wilhelminischen Ära - Wagnerkult und Kulturreform im Geiste völkischer Weltanschauung. Münster, 1971. S. 168.

34) M. F. Zumbini: Nietzsche in Bayreuth. S. 291.

35) ibid. S. 248.

のヴァーグナー」とは，「コスモポリタニズム」，「職人的な繊細さ」，「心理的虚弱」，「微細なものの巨匠」，「あらゆる秘められた悲惨さのオルフェウス」，「彼以前のいかなる者も持たなかった眼差し，情愛，そして慰めの言葉に満ち溢れた，われわれの最も偉大な音楽の鬱病患者」，「最小の空間に無限の意味と甘美さを押し込む，われわれの最も偉大な微細画家」としてのヴァーグナー，すなわち，「朽ち倒れた家々の片隅にひっそりと坐り込んでいるのが好きな」男であり，「そこに潜み隠れ，自分自身からも姿を晦ましつつ彼本来の姿を描いている」男であり，しかも「およそこの世で最も孤独な音楽を作りながらも」，同時に「大衆芸術の華やかな効果を追求」せざるを得ない男であったヴァーグナーである。つまりはニーチェの批判によって容赦なく暴き出され，19世紀デカダンスの巨魁としての正体をさらけ出す限りでのヴァーグナー，ニーチェによって用意された『ヴァーグナーの場合』の辛辣な舞台にいわば裸体となって登場するヴァーグナーが，ここでの「真のヴァーグナー」なのである。そしてこのような批判，このような区別によって「真のヴァーグナー」を後世のわれわれに伝えることができたという意味においてニーチェはヴァーグナーとわれわれとの間の《愛の仲立ち》の役割を果たしたというのが，ボルヒマイアーの論法である[36]。

ツムビーニは，当然のことながら「真のヴァーグナー」と「誤てるヴァーグナー」との区別の原理的な曖昧さを指摘し，ニーチェが「真のヴァーグナー」理解のための「愛の仲立ち」に仕立てあげられることによって，「最終的にはただ一人，すべてを浄化する真のヴァーグナーの偉大さのみが残ることになる」[37]だろうと警告する。なぜなら，「真のヴァーグナー」を世に伝える愛の使者となることによってニーチェはそのヴァーグナー批判のすべてと共にヴァーグナーに嘉みせられ，それによってニーチェ自身もまたいわば《真のニーチェ》となることが許されるということ，そして同じことだが，この《真のニーチェ》を従えた「真のヴァーグナー」の全能の姿がそこにあるということを，それは意味するだろうからである。ボルヒマイアーの眼には，ヴァーグナーとニーチェとがあたかもゲーテとシラーのように同じ台座に並び立つ感動の姿が浮かんでいるかもしれない。しかしツムビーニが上記の論考の脚注のひとつで引用しているかつての『バイロイター・ブレター』の編集者ハンス・フォン・ヴォルツォーゲンの言葉（1877）は，あの平和憲章《星の友情》のもとに《真のヴァーグナー理解者》としての使命をニーチェに負わせようとするボルヒマイアーの発想の根源に向けられたツムビーニの疑惑，それは結局，このいわば新平和憲法下でのかつての《バイロイト思想》の復活ではないのかという疑惑を裏付けるものといえるだろう。「ヴァーグナーを愛する者のみが，ヴァーグナーについて判定することが許される。私には公理であるこのパラドックスは，容易に立証されるだろう。人は自分が理解するものについてのみ判定を下すことが許される。だがヴァーグナーを理解する者は，ヴァーグナーを愛さねばならない。理解者として愛する者のみが，ひとり判定する能

36) D. Borchmeyer: Der Fall Wagner・Der Fall Tristan・Der Fall Nietzsche. S. 631f.
37) M. F. Zumbini: Nietzsche in Bayreuth. S. 248.

力を持つのである。」[38] ―この発言を支えているのは，強者の傲岸である。そしてまさにこの点にニーチェの，そしてまたニーチェの側に立つ者の苛立ちと悲しみがある。あの《星の友情》の理想は一方的にニーチェの側から差し出されたものであって，それを受け，それに応じるか否かは，これまた一方的にヴァーグナーの意志，ないしは好意に依存している。ニーチェの《友情》をヴァーグナーは受けるであろう，いや，受けてしかるべきであろうというのが，モンティナーリの，ボルヒマイアーの，そしてあの理想を現実のものとして仰ぎ見たいと願うすべての研究者たちの希望であり，負い目であり，屈託である。ニーチェのヴァーグナー批判は，それがいかに辛辣を極めようとも，根底においては愛の発露であり，理解への模索であったのだということを立証する以外に，ヴァーグナーの愛と信頼を呼び戻す術がないことを，彼らは知っているからである。グレーゴア=デリンのいう「不平等条約」は覆すべくもない制約としてあくまでも付きまとうのである。

平和憲章《星の友情》は《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を《地上》の確執から解き放つが，この問題そのものが孕んでいる内的緊張の重圧からも解き放つ。ヴァーグナーに捧げられた究極の《愛の書》となった『ヴァーグナーの場合』は，もはや解き難い《愛憎葛藤の書》であることを自ら放棄せざるを得ない。ボルヒマイアーはニーチェのヴァーグナー批判の格闘の中に依然として《アンビヴァレンツ》の苦悶を読み取ろうとしているが，ニーチェが「愛の仲立ち」に仕立て上げられたあとでは，この概念も虚しい抽象に過ぎない。《アンビヴァレンツ》の根底は《愛》であるという論理は，《愛と憎》が解き難く絡み合った全体であることをやめないという現実の上にのみ成り立つのであって，根底を成すであろう《愛》がその全体を突き崩して姿を現すことができるならば，そこにはもともと《アンビヴァレンツ》と呼べるほどの関係はなかったのである。「ヴァーグナーとニーチェとの関係の歴史は，両者が共に苦しんだ不幸な愛の歴史である」[39] と捉え，更にこの《アンビヴァレンツ》の核心を《デカダンス》問題として捉え，「ニーチェにおけるデカダンス概念のアンビヴァレンツは，彼のヴァーグナー批判を適正に把握するためには絶対に見失ってはならないものだ」[40] と主張するボルヒマイアーの論法は正しい，というよりは，誰もが歩く無難な教科書的な常道であるし，また，「同じ時代の子」として避け難く「デカダン」であらざるを得ない運命を認めようとしないヴァーグナーに対して，それを鋭く自覚し，それを乗り越えようとして自己と格闘している「良心の疼きをもつデカダン」，「反抗的デカダン」としてのニーチェが間断無く投げ続ける矛盾に満ちた批判の礫，「激しい嘲笑が突如として絶賛に転化し，称賛が罵倒に変化する」目まぐるしい「弁証法的」反語の一斉射撃を，トーマス・マンの評語「逆符号の称賛演説」(Panegyrikus mit umgekehrtem Vorzeichen) を借りて描いて見せようとする彼の手法[41] も，別段の異論を差し挟むだけの何かがあるわけではない。そもそも《アンビヴァレンツ》とは，《アンビヴァレンツ》に苦しむとは，ま

38) ibid. S. 265.
39) D. Borchmeyer: Der Fall Wagner・Der Fall Tristan・Der Fall Nietzsche. S. 628.
40) ibid. S. 633.
41) ibid. S. 636.

さにそうしたものなのだ。問題は，そのニーチェがなにゆえに「後世のための愛の仲立ち」に奉仕すべく《星の友情》のメロドラマの主人公に仕立て上げられねばならないのかということである。《憎悪》は《逆符号の愛》だというのがその論拠であるならば，それは《アンビヴァレンツ》の残酷さを知らない人間の感傷である。そこには《愛》もまた《逆符号の憎悪》であるという決定的な現実が揺るぎなくあるからである。—「私の最も大きな体験は快癒であった。ヴァーグナーはたんに私の病気のひとつに過ぎない。だが私はこの病気に対して恩知らずであろうというのではない。私はこの書において，ヴァーグナーは有害であるという命題を貫くが，にもかかわらず，ヴァーグナーは誰にとって無くてはならない存在であるか，哲学者にとってだ，という命題も同様に貫くつもりである。」[42] —「私は本書によってヴァーグナーに戦いを挑み，ついでにドイツ的《趣味》なるものにも一撃をくれ，—それからバイロイトのクレチン病に対しても酷い言葉遣いをしてやったが，だからといってその他の音楽家たちの誰かに嬉しがらせを言うつもりはさらさらない。他の音楽家たちなど，ヴァーグナーに比べれば問題にならない。」[43] —『ヴァーグナーの場合』の中を目まぐるしく飛び交うこの種の戦闘的ないしは戦術的な言葉も，《星の友情》の武装解除のもとでは，ただの追従でしかない。

3

《星の友情》を頭上に頂く雲の台座にニーチェとヴァーグナーとを並び立たせるためには，両者の関係を一切の俗塵から守り，《地上》のスキャンダルの危険を孕むものはすべて両者の関係の《哲学的》，《文化史的》意義の本質には触れ得ない俗世の偶然として排除する《衛生学的》見地が導入されねばならないだろう。なによりもまず，ニーチェのヴァーグナーからの離反をめぐる詮索の心理学的，病理学的基盤を一掃すること，とりわけニーチェがヴァーグナーから蒙ったと称するいわゆる《致命的な侮辱》の実相をめぐる議論を医学的所見の影響から解放することが肝要であるだろう。モンティナーリの信念によれば，「ニーチェのヴァーグナーとの決裂について心理学的，精神医学的にあちこちつつき回すような解釈はいずれもつねにただ伝記的な，すなわち，極めて不確実な論拠に頼るものでしかないがゆえに，問題の核心には触れてこない」[44] からである。

1883年2月13日，ヴァーグナーはヴェネツィアで急死するが，その9日後の2月22日付けのオーヴァーベック宛のニーチェの手紙[45] は，次のような一節を含んでいる。「ヴァーグナーは，私が知り合った誰にもまして断然豊かな人間でした。そしてこうした意味で私はこの6年間，非常な欠乏感に苛まれてきたのです。しかしわれわれ二人の間には，いわ

42) F. Nietzsche: Der Fall Wagner, Vorwort. KGW VI / 3. S. 4.
43) ibid. Zweite Nachschrift. KGW VI / 3. S. 40.
44) M. Montinari: Nietzsche - Wagner im Sommer 1878. in: NS. Bd. 14. 1985. S. 20.
45) F. Nietzsche: Briefwechsel, kritische Gesamtausgabe(KGB), hrsg. von G. Colli und M. Montinari. Berlin, 1975ff. III / 1. S. 337.

ば致命的な侮辱 (tödliche Beleidigung) ともいうべきものが介在しています。だからもし彼がもっと長生きしていたら，恐ろしいことになっていたでしょう。」—この《致命的な侮辱》が一方的なものなのか，相互的なものなのかは曖昧にぼかされてはいるが，この癒しがたい憤懣を宿した二文字は，ニーチェのヴァーグナーからの離反の決定的な原因が，あるきわめて具体的な，しかも怒りの激発を誘う生々しい心の損傷に根ざしたものであることを告げている。しかしニーチェは彼の著作や手紙においてこの損傷の存在を雄弁かつ多弁に暗示し続けながら，事実そのものについては口を閉ざし，事件の核心を憶測の藪の中に放置したのである。しかしこの謎の言葉をめぐる詮索とは別に，ヴァーグナーと個人的な交渉のあった彼の伝記記者たちの間では早くから，ニーチェのヴァーグナーからの離反の決定的な誘因と推定されるある種の《手紙》の存在が知られていたのであって，その間の事情については1920年代にルイートポルト・グリーサーがその『ニーチェとヴァーグナー』(1923) の中で簡単に触れている。「ユーリウス・カップがその『ヴァーグナー伝』において報告しているところによれば，この二人の人物の相反する発展の方向が原因となってもたらされた敵対関係とは別に，人間としての彼らを引き裂いたある私的な理由が存在しており，このことは1877年にヴァーグナーがニーチェの主治医アイザー博士に宛てた一通の手紙によって証明されるが，ただしこの手紙はその内容が個人生活に関わるものであるがために公表されていないという。グラーゼナップは，この手紙についてはただ，ニーチェの健康状態に関する報告を含むものであったとしか述べていない。」[46] —グリーサーは更に，この手紙がニーチェのコージマ・ヴァーグナーへの愛情問題に関係があるのではないかというハンス・ベラールの推定を有り得べき帰結のひとつとして肯定したのち，しかし「真相を解明できるものがあるとすれば，それはただこれまで公表されずにきたアイザー博士のヴァーグナー宛の手紙だけであろう」と締め括っている[47]。その後，1930年代の初頭，ヨーゼフ・ホーフミラーはその『ニーチェ』(1931) においてグリーサーの上記の記述をほぼそのまま引用し，次いで「問題解明の一助となるかも知れない」証言として，「ヴァーグナーは件の手紙でアイザー博士に，ニーチェの頭痛の原因としてある種の性的状態を暗示し，これがニーチェを激怒させたのである」という，ニーチェの死後ニーチェの著作集の編纂に当たったフリッツ・ケーゲルの言葉を挙げ，ヴァーグナーがアイザーと取り交わした手紙の公開が避け難いものであることを示唆したのち，「いずれにせよ私は賭けてもよいが，そのどちらの手紙にもニーチェのコージマへの愛などについては片言すら見当たらないはずである」と断定している[48]。このホーフミラーの着眼と予測は，ニーチェの離反問題への探索の先端がすでに，これまで秘匿されてきた《ニーチェの何事か》に関してヴァーグナーとアイザーとの間に交わされた手紙の公表を迫るところまで肉薄していたことを示している。そしてこのホーフミラーの要請に応えるかたちで手紙の公表に踏み切り，問題

46) Luitpold Griesser: Nietzsche und Wagner - neue Beiträge zur Geschichte und Psychologie ihrer Freundschaft. Wien, 1923. S. 292.
47) ibid. S. 398.
48) Josef Hofmiller: Nietzsche. in: Süddeutsche Monatshefte, 29. Jg., Ht. 2. München, 1931. S. 89.

に最終的な決着をつけようとしたのが，クルト・フォン・ヴェステルンハーゲンである。

ヴェステルンハーゲンは1956年に刊行されたその『リヒャルト・ヴァーグナー，彼の作品，彼の本質，彼の時代』にエピローグとして「ある伝説の批判，ニーチェの場合への注釈」と題する一章を特に設け，一連の《ニーチェ対ヴァーグナー》問題に辛辣な論評を加えている中で，あの《致命的な侮辱》を取り上げ，この言葉の謎の全貌を白日のもとに晒すであろう《未公開の資料》の存在を公式に明らかにした[49]。それはニーチェの健康状態あるいは病状に関するヴァーグナーの照会に対するアイザーのハンス・フォン・ヴォルツォーゲン（ヴァーグナーの代理人）宛の返事（1877年10月17日付け）と，それに対するヴァーグナー自身のアイザー宛の，それもニーチェの性生活の秘部に触れるきわどい所見を含む再度の照会（同年10月23日付け），それへのアイザーの返事（同年10月26日／27日付け），そして更にそれへのヴァーグナーの手紙（同年10月29日付け）の4通から成る往復書簡であり，この文通をなんらかの経路で知ったニーチェがこの私生活への侵害に激怒し，それを《致命的な侮辱》と受け取ったというのが，ヴェステルンハーゲンの推論である。この推論の弱点は，ヴェステルンハーゲン自身はヴァーグナーの行為に偽りない友情の発露以外の何ものをも見ていないにもかかわらず，相手がニーチェならば，あの性格からして，そこに「愛をではなく《致命的な侮辱ともいうべきもの》」を感じ取ったに違いないと断定し，この断定の論拠として先のホーフミラーの報告にあるフリッツ・ケーゲルからの伝聞を挙げている[50]ことである。いずれにせよヴェステルンハーゲンは「リヒャルト・ヴァーグナー資料館」所蔵のこの4通の手紙を「ヴィニフレッド・ヴァーグナーの好意ある許諾」のもとに「参考資料」として巻末に掲載し，それに基づいて《致命的な侮辱》の分析を展開するのである。

ヴェステルンハーゲンによれば，1877年の夏スイスのベルナー・オーバーラントでニーチェの面識を得たフランクフルト・アム・マインの医師オットー・アイザー博士は，ニーチェの病状を知って驚き，ニーチェにフランクフルトでの正規の診察を薦め，ニーチェもこれに従う。診察は，「発作的に極度の激しさを伴って生起する頭痛が神経中枢自体にその最終的な原因を持ち，従って脳および脳膜の組織的疾患の症候として把握されるべきものであるのか，それとも，患者の視力障害の根底を成している眼の疾患が頭痛とその周期的な悪化を二次的な誘発現象として生ぜしめており，それゆえ，頭痛の現象はもっと楽観的に考えて差し支えないものであるのかという最も重要な問題」を中心に行われ，ほぼ後者の判定に落ち着きはしたものの，眼科医クリューガーの検査によって「極度の近視」と共に脳痛の原因となり得る「眼底の変異」が指摘されたばかりでなく，「脈絡膜および網膜の慢性的炎症によって眼底の神経領域が大幅に蝕まれている」右眼は殆ど使い物にならず，

49) C. von Westernhagen: Epilog - Die Kritik einer Legende - Anmerkungen zum Fall Nietzsche. / Anhang: Briefwechsel zwischen Richard Wagner (bzw. Hans von Wolzogen) und Nietzsches Arzt Dr. Otto Eiser (Frankfurt am Main) im Oktober 1877. in: Richard Wagner - Sein Werk, sein Wesen, seine Welt. Zürich, 1956. S. 456-505 / S. 524-532.

50) C. von Westernhagen: „Etwas wie eine tödliche Beleidigung . . . “ in: Epilog - Die Kritik einer Legende. S. 493.

「高度の近視ながら，当面は正常な像を維持している」左眼も「同じ疾患に僅かながら侵されている」ことが確認され，ニーチェは，「ここ数年間にわたって読み書きを全面的に控えること」を「僅かに残された貴重な視力」を救うための絶対条件として命じられる。その後，ニーチェの手紙によって彼の身体の不調を知ったヴァーグナーはヴォルツォーゲンに依頼し，ニーチェの病状についてアイザーに照会させる。ヴァーグナーの崇拝者であるアイザーは，ヴァーグナーのニーチェへの友情に応えるかたちで上記の《所見》を綴った返書をヴォルツォーゲン宛てに送る。これに対して自らペンを執ったヴァーグナーは，アイザーにニーチェの健康状態についての《危惧》を打ち明ける。ニーチェの症状を知って思い出されるのは，「類似の徴候を示しながら破滅していった優れた若者たち」のことであるとヴァーグナーは書き，その徴候は「自慰の結果」であると断定し，こうした視点からニーチェをその気質や習慣のあらゆる面にわたって観察すると，自分の危惧は確信に変わると結論する。そしてそうした自分の若い友人の一人で数年前に死んだ詩人は，ニーチェと同年の時にすでに全盲であったし，また，いまなおイタリアで生ける屍となっている友人の一人は，ニーチェと同年の頃に酷い眼病を患っていたと続ける。「というわけで最近私の耳にした知らせは非常に重要です。それは，数年前ナポリでニーチェが診察を受けた医者が，ニーチェに何はさておき結婚することを薦めたというものです。」―次いでヴァーグナーは，自分の経験に照らして，水治療の効用を力説し，これをニーチェに強く薦めてほしいとアイザーに頼んでいる。「こういう場合，親しい医者は，医者めいた口をきく友人には与えられない力を持つものです。」―

これに対してアイザー医師は，当方の診察の結果はヴァーグナーの《危惧》を直接支持するものではないが，だからといって自分はヴァーグナーの多年にわたる徹底した観察の正しさを疑うものではむろんないと回答する。そして彼は，水治療がニーチェの健康回復のために有効であるという点ではヴァーグナーの見解と一致すること，来年の夏には是非この療法をニーチェに薦めるつもりだと書いたあと，自分がニーチェの健康状態についての所見をヴァーグナーに伝えたという事実をニーチェに告げるべきか，口を噤んでいるべきかは，ヴァーグナーの決断に任せたいとしている。これに対するヴァーグナーのアイザー宛の最後の手紙は，簡潔にこう結ばれている。「われわれの友人について言うことはもはや何もありません。私は彼があなたの愛情によって最善の保護を受けていることを知っています。私はいまの彼をどうしてやることもできません。彼が現実の窮乏に陥っているのでしたら，彼を助けることはできます。なぜなら私は彼とすべてを分かち合っているといえるのですから。」―

ヴェステルンハーゲンはなによりもまず，ニーチェの「精神的破滅」を予見したばかりか，その原因を「性的領域」に求めたヴァーグナーの「殆ど不気味なまでの洞察の深さ」に驚嘆し，そしてこのヴァーグナーの探索を知った時のニーチェの反応を想像し，それはまさに《致命的な侮辱》以外の何ものでもなかったはずだと断定する。ニーチェの激烈なヴァーグナー批判の源泉はここにある。ヴァーグナーのアイザー宛の手紙がすべての謎を解き明かす。「なかんずくこの手紙は，『ヴァーグナーの場合』と『道徳の系譜』において

ニーチェがヴァーグナーのいわゆるエロティシズムに対して，『パルジファル』における《変節》なるものに対して，憎悪に満ちた攻撃を繰り返して飽きることがなかったという事実にまったく新たな光を投じる。ニーチェは，自分がヴァーグナーによって面目を失墜させられたと信じたその同じ領域においてヴァーグナーの面目を失墜させようとしたのである。符号が異なるとはいえ，報復であることに変わりはない。」[51] —

このいわば総攻撃を最後に，ヴェステルンハーゲンはその年来の執拗なニーチェ追及の鉾を収めたかに見える。12年後の1968年に刊行された彼の新構想の『ヴァーグナー』においては，ニーチェに対する辛辣な言葉が影を潜めたばかりでなく，問題の《ヴァーグナー・アイザー往復書簡》も，ニーチェが1876年9月27日付けのヴァーグナー宛の手紙で訴えている《身体の不調》が決して《遁辞》でなかったことの《証拠》として挙げられているに過ぎない[52]。ヴェステルンハーゲンにおけるこの変化は，妹エリーザベトによるニーチェの手紙の改竄その他の画策が容赦のない摘発に曝され始めたことと無関係ではないだろう。事実，彼はこの点でのエーリヒ・ポーダハやカール・シュレヒタの業績を好意的に確認している[53]。

1975年，資料の批判的検討に基づくニーチェ研究の立場から，ヴェステルンハーゲン自身が置き捨てにしたかに見える問題の糸を再び拾い上げたのが，クルト・パウル・ヤンツである。彼はその論考『《致命的な侮辱》』において，この《致命的な侮辱》の原因をニーチェの音楽作品，特にニーチェの「自信作」である『友情への讃歌』に対するヴァーグナーの「拒否的」な態度に求めようとするこの時期の風潮を批判したのち，ヴェステルンハーゲン説を問題の源泉への「より良い道」として改めて取り上げ，それを，ヴェステルンハーゲンが公表した《往復書簡》に基づいてほぼヴェステルンハーゲンの意図通りに再構成する[54]。しかも1883年4月21日付けのハインリヒ・ケーゼリツ宛ての，次のような箇所を含む手紙[55]の一部を引用することによって，ヴェステルンハーゲンの解釈が根拠のないものではないことを示そうとさえしている。「ヴァーグナーは意地の悪い思いつきをふんだんに持っています。それにしても，彼が，私の考え方が変わったのは不自然な逸脱—ここでは男色が仄めかされているわけですが—の結果であるという彼の確信を表明するために手紙を取り交わした（それも私の医者たちと）のだとしたら，あなたは何と言うでしょう？」—「男色」の意味は不明だが，「これだけで《致命的な侮辱》となるのに十分である」というのがヤンツの結論[56]である。しかしヤンツは，ヴェステルンハーゲンが「道半ば」で仕事を切り上げたと批判する。なぜならあの《一件》以後の，それもニーチェがそれをすでに知っていたと思われる時期，例えば1882年9月初頭の時期においてニーチェはアイザー

51) ibid. S. 494.
52) C. von Westernhagen: Wagner. 1968. S. 457f.
53) ibid. S. 458f.
54) C. P. Janz: Die „tödliche Beleidigung“ - ein Beitrag zur Wagner-Entfremdung Nietzsches. in: NS. Bd. 4. 1975. S. 263ff. und S. 268ff.
55) F. Nietzsche: KGB. III / 1. S. 365.
56) C. P. Janz: Die „tödliche Beleidigung“. S. 276.

宛てに極めて友好的な手紙を書いており，また，同じ1882年6月末のバイロイトにおける『パルジファル』初演には当然招待を受けるものと期待してバイロイトと「指呼の間」にあるタウテンブルクに留まっていたからであり，それゆえ，ヴェステルンハーゲンがもしここまで道を辿ってきたならば，自説の貫徹が困難であることを，そしてこの問題そのものが一筋縄ではいかないことを知ったはずだからである[57]。そしてヤンツは次のように締め括る。複雑に入り組んだ多層的な状況の中で「《致命的な侮辱》は未解決のまま，取り返しのつかぬまま，燻り続ける残り火としてあとを曳き，その5年後に『ヴァーグナーの場合』および『ニーチェ対ヴァーグナー』の灼熱の炎となって燃え上がったといえる。」[58] そのニーチェ研究の集成である『ニーチェ伝』(1978/79) においても，この問題についてのヤンツの論旨と論調は変わらない。

ヴァーグナーとニーチェとの関係を本質的に異質な二人の人間の避け難い闘争と離反の歴史として描こうとするマルティーン・グレーゴア=デリンは，ニーチェの側からのヴァーグナー論にもヴァーグナーの陣営からのニーチェ論にも与しない，それゆえいずれの側に対しても厳しい態度で臨むという意味においてニーチェに対して極めて公正である。彼は，ニーチェのヴァーグナーからの離反の真の誘因をあの《ヴァーグナー・アイザー往復書簡》にあると見做し，その他の諸要素，例えば《パルジファル問題》はこの離反を促進する力として働いたに過ぎないという見地に立っている。そしてこの見地から《ニーチェ対ヴァーグナー》の闘争を徹底的に《地上》の闘争として追求することを彼の《ヴァーグナー論》の原則のひとつとして堅持している彼は，この問題に関してのいかなる不徹底も容赦しない。彼はまず，ヴェステルンハーゲンが公表したと称するあの《往復書簡》も実際には本当の《全文掲載》ではなく，ヴァーグナーの名誉に触れる恐れがあると思われる箇所が適当に省略されている点を指摘し，「ニーチェのこととなると暴露の喜びに駆られる」反面，「わが英雄ヴァーグナーには疵ひとつつけまいと絶えず汲々としている」ヴェステルンハーゲンの党派性を批判する。同時に彼は，ヤンツがヴェステルンハーゲンの所説を批判するに当たってヴェステルンハーゲンによって提出されたこの《不完全》な資料をそのまま無造作に借用しているばかりでなく，ニーチェの身に生じたこの出来事を《恥ずかしげに》語ってさえいる点を捉え，「資料フェティシスト」ともいうべきヤンツにあるまじき態度であるときめつけ，こうした身びいきから「批判的校訂を経た新しいヴァーグナー文献のすべてに対して眼も耳も持とうとしない」ヤンツを「ニーチェ研究のヴェステルンハーゲン」と呼ぶのである。そしてグレーゴア=デリンは《往復書簡》の全文を掲載し，しかもヴェステルンハーゲンが省略した部分をイタリック体で強調し，「この一連の文書はなによりもまず容赦のない論議に晒されねばならない。なぜならこれらの書簡はニーチェに深刻な侮辱を，傷を負わせた槍によってはもはや癒すことのできない深手を与えたからである」[59] と主張するのである。

57) ibid. S. 273ff.
58) ibid. S. 278.
59) M. Gregor-Dellin: Richard Wagner. S. 748f. und S. 881.

ヴェステルンハーゲンが公表するのを憚った箇所のひとつに，例えば次のようなものがある。ニーチェの性生活についてのアイザー医師の一連の質問に，ニーチェは「梅毒」に罹ったことはないと答え，また，「強い性的衝動」を覚えたり，「なんらかのアブノーマルな性的満足」を求めたりしたこともないと答えているが，学生時代に「淋病」に感染したこと，更にまた，最近イタリアで医者の指示に従い何度か「性交」を試みたことがあると報告する。アイザー医師は以上の答えから，この患者には「性衝動のノーマルな満足への能力が欠けていない」という所見を得て，これをその他の所見とともにヴァーグナーに知らせたのである[60]。たしかにヴァーグナーの崇拝者でもあればニーチェの崇拝者でもあったアイザーがヴァーグナーの真情溢れる要請に幻惑されて医師の黙秘の義務を破ってしまったのだという善意の解釈も成り立つだろう。だがニーチェがなんらかの経路でこの文通を知ったとき，彼はそれによってヴァーグナーが何を知ったかを知ったはずである。グレーゴア=デリンはこの情報漏れの出所を特定することはできないが，その経路については，祝祭期間中のバイロイトのホテルや個人の家が噂の巣窟であったことを考えれば，おおよその見当はつくとしている[61]。その時のニーチェの衝撃はどれほどのものがあったろう！《それ》を知ったのはヴァーグナーだけではない。おそらくはマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークも，そしてまたあの最も敬愛するコージマもだ。何という恥晒しであることか！ ヴァーグナーとアイザーとの間の《往復書簡》がもたらした《侮辱》の棘はあまりにも深く突き刺さったため，疵はヴァーグナーの死後においてさえ癒えることがなかった。これに比べれば『パルジファル』の衝撃など何ほどのことがあろう！[62]—因みに，『パルジファル』についていえば，1869年12月25日，コージマ32歳の誕生日に書き始められたその台本の草案を，ニーチェはすでに読んで知っており，この時の経験を友人のローデ宛の手紙の中で「最も美しく，最も心高まる思い出」として伝えていることから，ニーチェがこの時期ヴァーグナーのいわゆる「転向」と「十字架への拝跪」によって不意打ちを食らったとする解釈は成り立ち得ないというのが，グレーゴア=デリンの持論である[63]。

グレーゴア=デリンが『リヒャルト・ヴァーグナー』を刊行した1980年，モンティナーリは《これまで知られていなかった》一通のニーチェの手紙を発見する。そして1985年，彼は『1878年夏におけるニーチェとヴァーグナー』と題する短い論考を発表し，その末尾に，この「ヤンツにもグレーゴア=デリンにもまだ知られていない」手紙，すなわち，1883年2月21日（それゆえあのフランツ・オーヴァーベック宛の問題の手紙の前日）付けのマルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク宛の手紙がすでに1980年彼自身の編纂になる『ニーチェ全集普及版』(KSA)の《年譜》で紹介され，翌年には同『ニーチェ往復書簡集』に収録されていることを明らかにしたのち，問題の《致命的な侮辱》の真意を質そうとする「それ自体としてはさしたる意味のない」詮索に対してニーチェ自身が最終的な回答を与えて

60) ibid. S. 751.
61) ibid. S. 753.
62) ibid. S. 756.
63) ibid. S. 625.

いるものとして，以下のような箇所を含むこの手紙の中心部分を改めて引用している。

「(……) ヴァーグナーは私を致命的な仕打ちで侮辱しました ― 敢えてあなたにこう申し上げたい！ ― 彼がキリスト教と教会へとゆっくり後ずさりし，こっそり逃げ込んだということ，私はこれを私に対する個人的な攻撃と感じたのです。私がこうした行動に出ることのできるような人物に熱中していたと思うと，私の青春のすべてとその方向とが穢されたような気持ちになったのでした。(……) もし彼がもっと長生きしていたなら，おお，われわれの間に何が起こっていたか知れません！ 私はわが弓に恐ろしい矢をつがえていますし，また，ヴァーグナーは言葉によって人を殺すことのできる種類の人間の一人だからです。」[64] ―

《致命的な侮辱》の原因が《ヴァーグナー・アイザー往復書簡》にあるのではなく，ヴァーグナーのキリスト教への屈伏，すなわち《パルジファル問題》にあったことを告白していると読めるこの手紙は，問題の核心は《心理学的・病理学的》なものではあり得ないとするモンティナーリの持論がほかならぬニーチェ自身の証言によって支持されたことを意味するといえるだろう。ヴァーグナーにおける「ショーペンハウアー的・仏教的・キリスト教的救済神話の最終的な芸術的形成」が「意志の放棄，罪としての生の否定という形而上学的な基本姿勢」のみを辛うじて残す幻影となり果て，「《パルジファル音楽》の恐ろしい魅力と誘惑的な美」のうちに「ドイツ・ロマン主義の全体がその最も遅い，最も爛熟した，消耗し尽くした，いや，最もデカダン的な姿に身をやつして，死への，無への憧憬に全面的に屈伏してゆく」[65] その有り様は，「ほかならぬ音楽に対してその歴史的，反形而上学的姿勢」を徹底させつつあった当時のニーチェ[66] にとって，かつての自分が「熱中した」年長の友人からの「致命的な仕打ち」による《侮辱》以外の何ものでもなかったのであり，そしてこの痛恨をあの「幸福の島トリープシェン」[67] への限りない想いと共に吐露したのが《星の友情》のアフォリズムにほかならなかったというのが，ニーチェの離反の真相をめぐる議論におけるモンティナーリの前提であり，結論である。しかし問題は残る。例えば『ヴァーグナーの場合』が，とりわけ『道徳の系譜』の第三論文『禁欲的理想の意味するもの』が『パルジファル』に公然と浴びせている殆ど狂躁に近い反語的嘲罵の一斉射撃の秘められた原因が《致命的な侮辱》であったなどということを，最近発見された一通の手紙によって初めてわれわれは知らねばならないというのだろうか。あるいはまた，1887年にモンテカルロで『パルジファル』の前奏曲を初めて聴いたニーチェが書き残している次のような断想をモンティナーリはあの《致命的な侮辱》の告白とどのように重ね合わせ，折り合わせようとするのだろうか。「『パルジファル』の前奏曲，久しぶりに私に与えられたこの上なく大きな慰楽だ。感情の威力と厳しさは名状し難い。キリスト教精神をかくも深い所で捉え，かくも鋭く共感させるものを，私は知らない。身も心も高められ，感動さ

64) M. Montinari: Nietzsche - Wagner im Sommer 1878. in: NS. Bd. 14, 1985. S. 21.
65) ibid. S. 16.
66) ibid. S. 19.
67) M. Montinari: Nietzsche und Wagner vor hundert Jahren. S. 301.

せられた。— いかなる画家もヴァーグナーのような名状し難いまでに陰鬱にして情愛に満ちた光景を描いたことはなかった。」[68] — だがこうしたことについて，ニーチェの発想と書法のすべてを知り尽くしていたはずのモンティナーリに改めて問い質す必要はないだろう。反復常なきニーチェの書法のレトリックを知り尽くしてなおあの《一通の手紙》にニーチェの《真意》を繋ぎとめようとするモンティナーリの意図のすべては，《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を心理学的・病理学的解剖を含む伝記的研究の《人間的，あまりに人間的》な次元から救出するという一事に凝集している。彼は前掲の論考『百年前のニーチェとヴァーグナー』に続く《討論》において，「伝記と哲学とがニーチェにあっては合体する。それゆえ伝記は哲学である」[69] と述べている。それゆえまた哲学は伝記であるとは，彼は言わない，いや，言うことができない。一切を《哲学的地平》へ！ これがモンティナーリの祈りであり，この祈りを，彼はニーチェの，いや，彼自身の《星の友情》の理想に託したのである。

平和憲章《星の友情》のもと，いまは世にないとはいえ，その提唱者で，ニーチェの作品，遺稿，手紙の集大成である《全集版》の編纂者の一人だったマッツィーノ・モンティナーリを筆頭に，『リヒャルト・ヴァーグナー提要』の監修者の一人であるペーター・ヴァプネフスキー，《ニーチェ対ヴァーグナー》関係資料集の編纂者であるディーター・ボルヒマイアー，そしてニーチェの最新の包括的な『伝記』の著者として知られるクルト・パウル・ヤンツが，すなわち，《ニーチェ対ヴァーグナー》問題の現在における最も有力な研究者たちが寄り集い，ニーチェ・ヴァーグナーの《地上的確執》の終結に調印して並び立つ姿は，《ニーチェ対ヴァーグナー》問題の過去の暗黒とモンティナーリの理想主義を顧慮してさえもなお，一種の奇観である。あの《致命的な侮辱》に関してもヴァプネフスキーは，モンティナーリによる「手紙の発見」によって「侮辱の真の性格はもはや疑う余地のないものとなった」[70] と断定し，また，ボルヒマイアーは，この《手紙》によって「マルティーン・グレーゴア=デリンがその 1980 年の『ヴァーグナー伝』の中で最終的におこなっているこの言葉についてのもろもろの思弁はその基盤を奪われた」[71] として一件の落着を宣言し，グレーゴア=デリンの方向を封じようとしている。更にまた，グレーゴア=デリンから《資料フェティシスト》の名誉ある称号をもって呼ばれたヤンツは，この点に関してはさすがに用心深く対処し，モンティナーリの断定には批判的な姿勢を崩していない[72] が，にもかかわらず，その《宛先》については確たるニーチェ自身の証言もないまま，いわば傍証のみで固められたに過ぎない《星の友情》の理想には進んで賛同し，前掲の 12 人の論集『ヴァーグナーの場合』の巻頭論文として寄稿している論考『われわれを支配する法則』の末尾で，ニーチェが「彼のヴァーグナー経験の一切を《人間的，あまりに人間的》なもの

68) F. Nietzsche. KGW. VIII / 1. S. 202f.
69) M. Montinari: Nietzsche und Wagner vor hundert Jahren. S. 306.
70) P. Wapnewski: Nietzsche und Wagner - Stationen einer Beziehung. S. 419.
71) D. Borchmeyer: Richard Wagner und Nietzsche. S. 130.
72) C. P. Janz: Das Gesetz über uns. S. 20.

を超えた高みへと昇らしめ，それを—1882年—星々の青銅の軌道へと乗り移させている」[73] このいわば《恩讐の彼方》の友愛精神を讃えるのである。そしてこの論集の『緒言』の筆者は，既述のように，ニーチェのヴァーグナーへの訣別の書を両者宥和のアフォリズムのための「補足」として理解せよという提言をもって《ニーチェ対ヴァーグナー》問題を総括するのである。このような集団的結束に基づく，時には高飛車な一方的断定は，ニーチェ研究の一角にある種の強い充血状態をもたらすばかりではない。それはまたニーチェの自由な読者たらんとする者にとってまさしく《致命的な侮辱》でさえあるだろう。ニーチェの読者はニーチェ研究の読者でもなければならないとするなら，ニーチェの読者はそのことにどこまで耐えられるかという疑問を，《ニーチェ対ヴァーグナー》問題研究の現況は少なからず呼び起こすのである。

‚Sternen-Freundschaft' als Magna Charta des Ewigen Friedens

— Wohin mit dem Nietzsche / Wagner-Problem ? —

SAKATA Kenichi

„Der persönliche Bruch [mit Wagner (K. S.)] wird durch die unabweisbare Konsequenz von Nietzsches geistiger Entwicklung erklärt, nicht umgekehrt. Sämtliche biographische Begleiterscheinungen sind von Wagnerianern und Nietzscheanern überschätzt worden. Die wissenschaftliche biographische Forschung soll mit historischer und philologischer Akribie auch hier zu Werk gehen. Doch zum historischen Sinn gehört auch, daß man sich der entscheidenden Tatsache bewußt bleibt: Nietzsches Bruch mit Wagner war eine geistige, eine philosophische Tat, an der jeder biographische Fund vorbei erläutert, (. . .)". Das ist die Position Mazzino Montinaris. In diesem Sinn beschließt er seine Ausführungen über ‚Nietzsche und Wagner vor hundert Jahren' [1978] mit dem „Finale jenes Aphorismus" aus der ‚Fröhlichen Wissenschaft', in dem „Nietzsche von der erhabenen Möglichkeit einer ‚Sternen-Freundschaft' mit einem fremd gewordenen Freund (eben Wagner) spricht". Dieses „Finale" endet so: „Und so wollen wir an unsere Sternen-Freundschaft *glauben*, selbst wenn wir einander Erden-Feinde sein müssten." [Aph. Nr. 279].

Dieses Ideal einer überirdischen Freundschaft setzt Montinari einer Ansicht entgegen, die etwa von Martin Gregor-Dellin, dem Repräsentanten einer anderen Forschungsrichtung, vertreten wird. Dieser faßt in seinem Buch ‚Richard Wagner' [1980] den Konflikt zwischen Nietzsche und Wagner als den Kampf zweier großer, „typologisch (. . .) abgrundtief" verschiedener Menschen auf und läßt daher jedwedes

---

73) ibid. S. 31f.

metaphysische Prinzip als ganz unnötig außer acht. Er will Nietzsche eben damit gerecht werden, daß er alle Dokumente, welcher Art sie auch sein mögen, also auch die psychologisch oder gar pathologisch relevanten ans Licht zieht. Davon müsse „schonungslos die Rede sein". Montinari möchte vor allem Gregor-Dellins Deutung von Nietzsches Formulierung: ‚tödliche Beleidigung' widerlegen. Gregor-Dellin beruft sich auf die von Wagner in seinem Briefwechsel mit Otto Eiser formulierte Hypothese über das nicht normale sexuelle Leben Nietzsches. Dazu Montinari: „(. . .) jede psychologisierende, psychiatrisierende, hin und her ärztelnde Deutung von Nietzsches Bruch mit Wagner interpretiert am Kern der Sache vorbei (. . .)" (‚Nietzsche - Wagner im Sommer 1878', [1985]). Dagegen führt Montinari den erst 1980 von ihm veröffentlichten Brief Nietzsches an Malwida von Meysenbug vom 21. Febr. 1883 ins Treffen, den er so interpretiert, daß mit dem Wort ‚Beleidigung' nichts anderes gemeint sei als: Wagners „Zurückgehn und -Schleichen zum Christenthum und der Kirche" in ‚Parsifal'.

Die idealistische Tendenz Montinaris, die alles Irdisch-Biographische ausschließen will, um in einer Art von hygienischem Purismus nur dem rein Geistigen die Einreise in jene überirdische Welt der ‚Sternen-Freundschaft' zu gestatten, scheint unter den maßgebenden deutschen Nietzsche- und Wagnerforschern Zustimmung und Unterstützung gefunden zu haben. Z. B. sieht Dieter Borchmeyer die gesamte Kritik Nietzsches an Wagner als den Versuch an, diesen aus dem „weltanschauliche(n) Sumpf, in dem er tief eingesunken war", z. B. aus der „Kondeszendenz zum nationalistischen Chauvinismus nach 1870", zu retten und von diesem „falschen" Wagner den „eigentlichen" Wagner zu unterscheiden und ihm dadurch „in Hinblick auf die Nachgeborenen den größten Liebesdienst" zu erweisen. Für Borchmeyer ist daher Nietzsches Wagner-Kritik und damit all seine ‚Erden-Feindschaft' gegen diesen nichts anderes als seine „Via dolorosa" gewesen, an deren Ende er nur jene ‚Sternen-Freundschaft' zu finden gehofft habe. Von dieser himmelhohen Position aus kanzelt Borchmeyer sowohl die „vierschrötige(n) Altwagnerianer" als auch deren Gegenpartei, die noch heute fast nur an der ‚Erden-Feindschaft' zwischen Nietzsche und Wagner interessiert seien, als „Halbgebildete" ab. (‚Der Fall Wagner - Der Fall Tristan - Der Fall Nietzsche', Nachwort zu ‚Friedrich Nietzsche, Der Fall Wagner', [1983])

Selbst Curt Paul Janz, der bekannte Nietzsche-Biograph, der Montinaris Deutung des Ausdrucks ‚tödliche Beleidigung' als einseitig kritisiert hat, stimmt mit ihm doch in der Ansicht überein, daß das Verhältnis Nietzsches zu Wagner letztlich im Sinn der ‚Sternen-Freundschaft' aufzufassen sei. Janz entwickelt diesen Gedanken in dem Aufsatz ‚Das Gesetz über uns, Friedrich Nietzsches Wagner-Erfahrung', der für den Sammelband, in dem er erschienen ist (‚Der Fall Wagner, Ursprünge und Folgen von Nietzsches Wagner-Kritik', [1991]), wegweisend gewesen zu sein scheint. So heißt es in der Einleitung dieses Sammelbands, die gemeinsameVoraussetzung für die Aufsätze der zwölf Autoren sei die „begründet(e) Erkenntnis", daß ‚Der Fall Wagner', „ungeachtet seiner Leidenschaftlichkeit, als Komplement zum ‚versönlichen' Aphorismus ‚Sternen-Freundschaft' verstanden" werden müsse.

Es ist wahrlich eine große, unglaublich rührende Szene: so viele Nietzsche- und Wagner-Spezialisten, auch Janz, haben hier den Kontrakt des Ewigen Friedens zwischen Nietzsche und Wagner unterzeichnet! Und welche Mühe sie sich dabei gegeben haben! Aufblickend zum gestirnten Himmel über sich, „verstehen“ sie ein Meisterwerk Nietzschescher Wagner-Kritik, das zugleich die Quintessenz seiner Rhetorik enthält, als „Komplement“ zu jenem „erhabenen“, doch nicht wenig auf die Tränendrüsen drückenden Freundschaftserguß.